

一写一筆

静岡の今

今年話題になった言葉を選ぶ「ユキヤン新語・流行語大賞」で年間大賞になつたのは「爆買い」だつた。バーゲンセールなどで大量の買い物をする風景は珍しいことではな

いが、今年の大賞に選ばれたのは急増している中国人観光客による土産物の大量買いが、各地で話題になつたからだろう。

受賞に貢献したのは、静岡空港で以上の中国人が出入国し、地方管理空港では全国一となつた。

ターミナルは連日中国人旅行者でごった返し、免税店の「メイド・イン・ジャパン」商品は前年比3倍の売れ行き。管理する富士山静岡空港会社では社員の中国語研修に大わらわだ。

にぎわいの中で難産だった空港の出生は風化しようとしている。「最後の地方空港」といわれた大型公共事業は当時、バブル崩壊で工事が急減速。27万人が署名し、建設の是非を問う住民投票条例の制定を求める動きもあつた。測量ミスで立ち木が航路を妨げ、開港も遅れた。

開港から6年。県は上海、ソウル、台北、シンガポールに駐在事務所を開設。東南アジアやモンゴルに「ふじのくに地域外交」のウイングを広げた。静岡空港を拠点に川勝平太知事の積極外交が花開こうとしている。

開港式典の日、石川嘉延・前知事が詠んだ短歌がある。

難産の末に生まれし児に似たる

静岡空港弥栄願う

開港後、前知事の自宅に飾られた掛け軸もはずされた。難産の子も6歳、伸び盛りの小学生である。

(県代表監査委員・富永久雄)



たくさんの荷物を持った中国人観光客＝JR東海道線車内で、全日写連山田康さん撮影